2021年度南山大学人類学博物館・明治大学博物館協定事業

# 民族誌資料に見る
# タカラガイの利用のかたち

－南山大学人類学博物館の資料から－

補足

南山大学人類学博物館

# はじめに

　こちらは、「民族誌資料に見るタカラガイの利用のかたち－南山大学人類学博物館の資料から－」の

・タカラガイとその利用について
・南山大学人類学博物館のコレクションについて

の補足説明です。オンライン展示と合わせてご覧ください。

# 民族誌資料

って何？

- **民族誌資料**とは、民族集団が育んできた知識や文化を知りうるあらゆるもののことです。

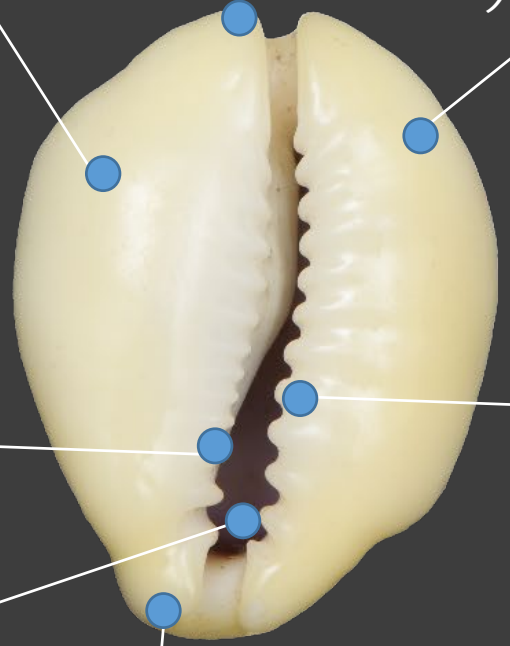
- 具体的には日常的な生活道具、儀礼用の道具、装飾品、写真や音声データなど、様々なものが当てはまります。

# タカラガイ

について

部分名称

キイロダカラ背面




キイロダカラ腹面

# キイロダカラの生体写真

・タカラガイは生時、殻部分を目立たない色の外套膜で覆っています。
・外套膜によって殻を付着生物から守り、殻の光沢が保たれます。

写真：理科教材データベース（岐阜聖徳学園大学）/NPO海の自然史研究所

# タカラガイの生息域

・今回の展示では、小さいものから順に紹介しています。基本的には潮間帯に生息する、採集に苦労はしないタカラガイです。

| 資料番号 | 資料名 | 生息深度(m) |
|---|---|---|
| 資料1 | ウキダカラ | 潮間帯～20 |
| 資料2 | ハナビラダカラ | 潮間帯 |
| 資料3 | キイロダカラ | 潮間帯 |
| 資料4 | ナツメモドキ | 潮間帯～10 |
| 資料5 | ハナマルユキ | 潮間帯 |
| 資料6 | ヤナギシボリダカラ | 潮間帯～35 |
| 資料7 | ホシキヌタ | 潮間帯～150 |
| 資料8 | カバフダカラ | 潮間帯～20 |
| 資料9 | ヤクシマダカラ | 潮間帯～20 |
| 資料10 | キッコウダカラ | 潮間帯～20 |
| 資料11 | タルダカラ | 潮間帯～30 |
| 資料12 | ハラダカラ | 潮間帯～30 |
| 資料13 | ジャノメダカラ | 潮間帯～30 |
| 資料14 | ハチジョウダカラ | 潮間帯～10 |
| 資料15 | ホシダカラ | 潮間帯～40 |
| 資料16 | ムラクモダカラ | 潮間帯～30 |

## ・タカラガイがあの形になるのはなぜ?

多くの巻貝は制限なく螺旋状に殻を発達させますが、タカラガイは螺旋成長の途中で外唇を内側に折れ込み、螺旋成長を止めて球形になり、その後は殻の厚みを増加させるという特異な成長様式をとります。
ほとんど変わらない種もありますが、基本的には成長とともに殻の形、色、模様が変化していきます。

・幼貝→ヤシ型で殻口が広い。
・亜成貝→殻口がせまくなり、内外唇に強い歯が形成される。
・成貝→内外唇が強く歯状に刻まれ、模様や色がはっきりと特徴づく。

## ・繁殖と寿命

タカラガイは雌雄異体で、成貝になってから繁殖します。殻形態からは雌雄差は認められません。
多数の卵が入った卵嚢を礫等に生み、多くの場合親が卵嚢を保護します。卵は卵嚢中で発生し、
プランクトン幼生となって分散していきます。明確な繁殖時期は不明で成貝までは1年程度とみられますが、
寿命は分かっていません。

## ・食性と天敵

タカラガイは他の巻貝のように口に歯舌というおろし金のような歯を持っていて、微細な海藻や岩の表面に
付着している動物を削り取って食べています。タカラガイはカニ、タコ、深所の魚に捕食されます。
殻に損傷が見られない場合、水温低下が死因のことが多いです。

## ・タカラガイの進化

タカラガイの祖先と考えられる化石は、1億4千年前頃に恐竜がいた中生代から知られています。
その後、約5000万年前頃の新生代(始新世)のフランスからは殻高が25cmを越え、殻に突起のある
Gisortia等の特殊な群も普通タイプと共に出現し、3000万年前(漸新世)からは一見すると現在のものと
よく似ているものが大半となりました。

## ・タカラガイの殻の変色

タカラガイは紫外線の当たらない暗い場所で保管し、カビを防止することが重要です。
しかし、気を付けていても、色素の変化や水分の抜けは完全に防止できません。

## ・摩耗

タカラガイの殻には色層が重なっていて、殻の表面が擦れると中から違う色が出てきます。海岸に
打ち上がるタカラガイは、摩耗の度合いによって同じ種類でも違う色をしていることがあります。
綺麗なタカラガイを手に入れたい場合は、生きているタカラガイを入手するのが確実です。

## ・タカラガイは食べられる？

身を取り出すのに手間がかかる、身が小さいなどの理由からあまり積極的に食べられてはいないようですが
タカラガイは食べることができます。味は悪くないようです。

# 利用

の歴史

・タカラガイは世界中の様々な場所、時代に利用されてきました。

・イェリコ遺跡(エリコ遺跡)：パレスチナ東部、ヨルダン川の谷底につくられた遺跡。死海の北西約11キロに位置する旧約聖書にも記された世界最古の都市跡。紀元前7000年の地層から目にタカラガイを埋め込まれた若い女性の頭蓋骨が出土。タカラガイの目への利用では最古の記録とみられます。種類はハナビラタカラで、紅海産と判定されています。

・古代アフリカ：タカラガイは生殖のシンボルとして広い範囲で多用されました。豊穣、再生をもたらす呪物として、1万年ほど前から墓葬には欠かせない副葬品とされてきました。腹面が悪魔の呪いに対抗する目として考えられ、現在でも呪物として、法的な弁済金としても利用されています。

・古代ヨーロッパ：現在のフランス南部、黒海東方のクバン地方、北方キエフ、ロシアのウラル山脈西方、クレタ島、高緯度のスウェーデンなどの旧石器時代後期～10世紀頃までの遺跡で副葬品としてのタカラガイが出土しています。

・キイロダカラ等の採集は容易で、危険がほとんど伴いません。ただし、生貝から腐らせて中身の軟体を取り除く作業は1個ずつ手作業で行わないといけません。

・時間と手間がかかり、単価は低いながらも、比較的簡単な技術で製作できるタカラガイ製品はアジア・太平洋地域の人々にとっての収入源、地域経済の一部となっています。

# 貝貨

としての利用

・貝貨（ばいか、かいか）
貝殻を用いた貨幣で、アジア、アフリカ、オセアニア、アメリカで使われていました。特にキイロダカラ(Monetaria moneta)とハナビラダカラ(Monetaria annulus)が広範な地域で用いられました。

・「貝」の漢字はタカラガイの象形文字で、「目」の部分がタカラガイ腹面の歯を表しています。「貯」は貝を真ん中に置いて囲う、「珍」は貝を両手ですくって珍重する、「得」は貝の下に手がついていて、タカラガイを手に入れる形で得る、という意味を表すなど、「金」や「財」を表す漢字には貝が含まれています。

・英語で現金を表す「cash」はヒンディー語でタカラガイを表す「caixi」が語源です。

・貝貨の使用目的は7つに集約されます(白井 1997(1) P69-P70)。

1.地位の印として(Status Markers)
2.商品との交換用として(Exchange for Good)
3.結納金として(Marriage Payments)
4.報酬として(Compensation)
5.貢物として(Tribute)
6.儀式の交換用として(Exchange for Services)
7.価値の基準として(Standardized Units)

これらが単独ではなく複数の目的に使用されるのが貝貨の特徴です。

# 中国の貝貨

・中国では殷(紀元前17世紀～紀元前1046年)の時代からタカラガイが貨幣として使用された、という説が広く知られています。

・新石器時代以降の黄河流域、とくに殷や周時代の墓葬から多くのタカラガイが出土しているため、中国最古の貨幣、もしくはそれに類するものとみなし、中国貨幣史の原型とされていました。

・しかし、近年特に中国以外の学会では、殷や周のタカラガイは実際には殷系人を対象とする贈与交換の対象であったという説が強まっています。装飾品・呪物・贈与物・身分制的支払手段としての性質を強調し、貨幣としての機能は無かった、または限定的であったと解釈されています。

・殷周時代の墓葬から出土するタカラガイのほとんどはキイロダカラとハナビラダカラです。
なぜタカラガイでないといけなかったのか、は色々と検討されていますが(美しさ、入手の困難さ)
価値を呪術的重要性に求めた(柿沼2011 P84)のではないかと考えられています。

・殷周のタカラガイは基本的に支配者層の墓葬で出土するもので、上位者から下位者へのタカラガイの賜与を記念して下位者が青銅器の銘文(宝貝賜与形式金文)を作るということもされました。タカラガイは「生命と再生のシンボル」としての価値を有し、それゆえに受賜者は賜与にこたえて祖先祭祀用の青銅器を作り、その恩恵を受賜者の祖先にまで及ぼそうとしたのだろう(柿沼2011 P86-87)とされます。

・タカラガイを重視する文化は、殷が勢力を拡大し、殷系人が地方に拡散するにつれて各地に広まっていった可能性が高いと考えられます。殷の支配者層がタカラガイを独占していたのでタカラガイ文化の拡大は支配者の意向に沿って行われていたと考えられます。

・殷王朝が滅亡した後、殷を滅ぼした西周はタカラガイの賜与を継続したと考えられています。西周中期後半以降になると、宝貝賜与形式金文は減少しますが、タカラガイを副葬品とする慣例は続いていくため、タカラガイ文化自体が消滅した、入手が困難になったという訳ではなさそうです。

・タカラガイは「生命と再生のシンボル」として受賜者一族の繁栄のために贈与交換され、必ずしも現代貨幣と同じような性格を有しているわけではありませんでした。「タカラガイ＝貨幣」とする「記憶」は貨幣経済の常識の中で生きる人々が「古のタカラガイ＝贈与物として貴重な物」という認識と、「貴重なもの＝貨」という認識、「貨＝財を分かち利を布きて有無を通ずる所以の者」という認識を混交した結果、新たに創造されたものではないか(柿沼2011 P93)と考えられています。

・タカラガイは戦国時代にはすでに呪術性・神聖性といった脈絡から切り離され、貨幣経済における物財一般の象徴となりました。戦国時代以降の人々はこのように生み出された「タカラガイ＝物財一般の象徴＝貨幣」という認識に基づいて殷周宝貝文化を再解釈し、それを貨幣誕生の記録として「記憶」したのだとみられます。

・中国西南部、雲南では清の支配下となる1680年代まで、交易の貨幣としてタカラガイが使用されていました。

# 日本のタカラガイ

・日本でも、縄文時代後期(4000年前)以後の遺跡からタカラガイが見つかっています。縄文時代の加工も、背面を除去する、背面に穴をあけるなどの加工がみられます。また、内唇部と外唇部に分けるという加工がされていることもあります。

・殷系人との違いとして、殷系人がキイロダカラを重要視するのに対して、縄文人はホシダカラ、ハチジョウダカラ、ヤクシマダカラ、ホシキヌタなど大きなタカラガイも好んで使用しています(安木2021 P48)。

・縄文人は一つの貝を二つに割って使用していて、鋸歯部がはっきりしている外唇部が好まれていたようですが、なぜなのか、何のために使われていたのかは分かっていません。

・縄文人が比較的大きなタカラガイを好んだのは、殷系人とは違い外唇と内唇に分けて使うため小さいと加工が難しかったからではないかと考えられます(安木 2021 P49)。

・弥生土器と共伴したものは頂部をうちかいたり、磨りおろしたりしたタカラガイが鹿の卜骨を伴って発見されています(三島 1977 P48)。

・平安時代には『竹取物語』に燕の子安貝(タカラガイ)が登場し、朝廷への調として、安産のお守りとしてタカラガイの使用が続きました(安木 2021 P49)。

# 南山大学人類学博物館のタカラガイ資料

**後藤明コレクション**

**1980年代～**

**パプアニューギニア資料**

**1960年代**

**西江雅之コレクション**

**～2000年代**

**後藤明コレクション**

**1980年代～**

後藤明コレクションは、2008年に人文学部後藤明教授から当館に寄贈された、東南アジアとオセアニア諸国を20年にわたり調査した過程で収集された民族学および考古学資料のコレクションです。

今回展示に出したタカラガイは、フィリピン･セブ島の貝交易商の調査の際に集められたものです。国際市場に貝を輸出するセブ島の貝交易商の全体像、タカラガイやタカラガイ以外の熱帯産の貝を知ることができる貴重な一括コレクションです。

**パプアニューギニア資料**

**1960年代**

南山大学人類学博物館が所蔵するパプアニューギニアの資料は、大きく2つに分類することができます。

・南山大学東ニューギニア学術調査団が1964年8月からおよそ5カ月間にわたって調査を行った際に収集した資料群

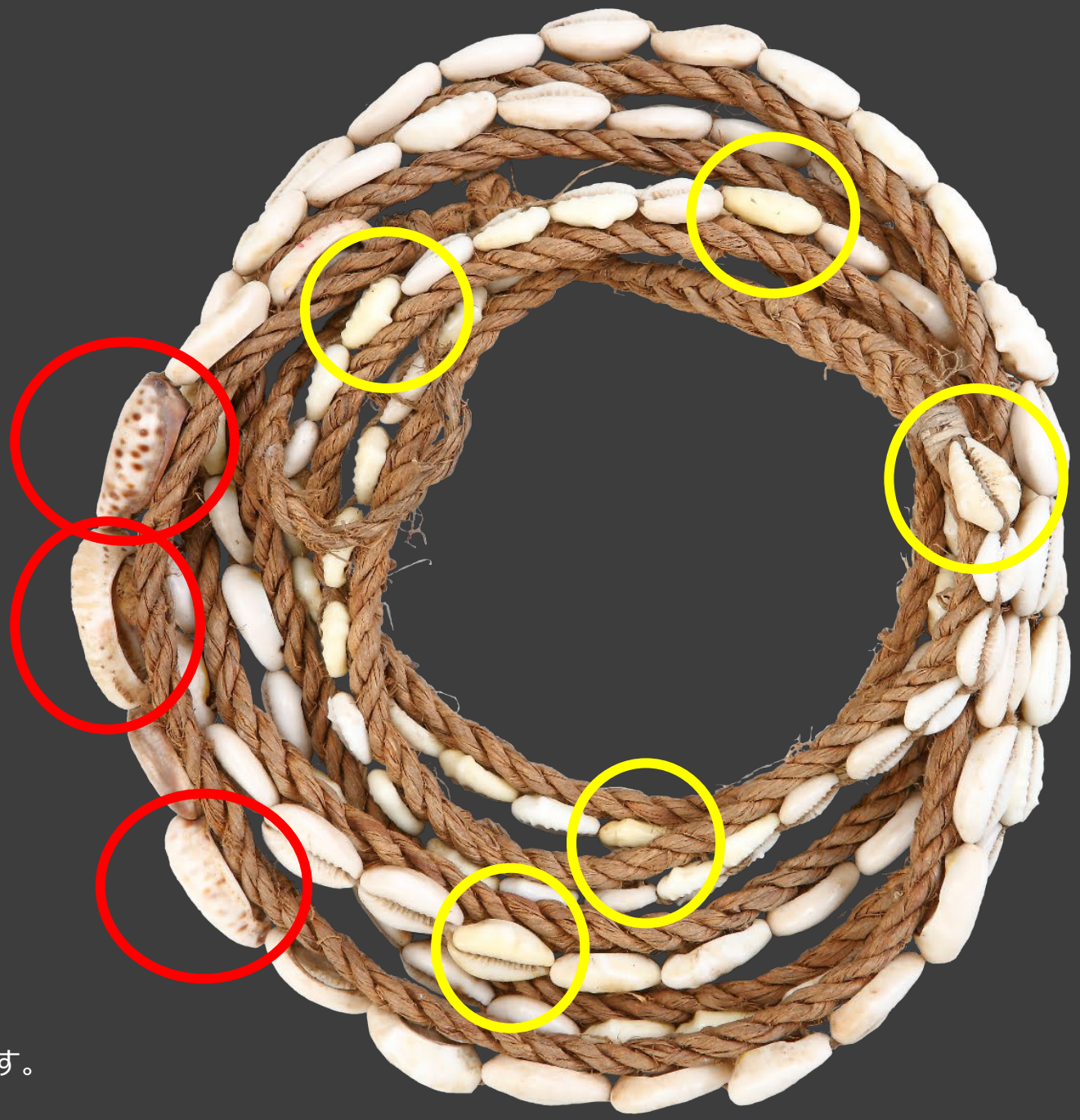
・神言修道会の神父として20年近くニューギニアで布教活動をし、東ニューギニア学術調査団にも加わっていたH･アウフェンアンガー氏がセピック川流域で収集した資料群

ニューギニア島は世界で2番目に大きな島で、島の東半分が現在のパプアニューギニア独立国です。数百もの多種多様な部族が伝統的な生活を送っていました。

19世紀に入り、西欧文明と接触することで、ニューギニアの人々の生活や伝統も変化し、文化や価値観が失われていきました。

伝統的な生活が変わりつつある時期に収集されたこれらの資料は、現在では入手できない貴重な資料です。

# 展示品のピックアップ紹介



資料23　胸飾り

　全長：238cm
収集地：パプアニューギニア

タカラガイの背面を割り、紐で縄に固定しています。
基本的にはハナビラダカラが使われていますが、
ところどころにキイロダカラやホシダカラが使用されて
います(赤丸:ホシダカラ 黄丸:キイロダカラ)。

他の資料もほとんどがキイロダカラ、ハナビラダカラで、
一部にホシダカラ、ナツメモドキなどが使用されています。

**西江雅之コレクション**

**～2000年代**

西江雅之コレクションは、言語学者･文化人類学者であった西江雅之氏(1937-2015)がアフリカ、パプアニューギニア、アメリカ、アジアなど世界各地で収集した約900点のコレクションです。
西江氏の没後、長兄の西江寛氏、弟子の加原奈穂子氏の尽力によって当館に寄贈されました。

西江コレクションには様々な資料が含まれています。
標本、剥製、絵画、彫刻、貝、土製品、楽器、仮面、装飾品…

コレクションには、実際の儀礼で使用されていた民族誌資料の他、お土産用に作られ、販売されていたものも含んでいます。

今回の展示で出したタカラガイが使用されている資料は、多くがパプアニューギニアのものです。

# 展示品のピックアップ紹介

背面を割り、腹面を使用することが多い
タカラガイですが割られた背面が装飾に
利用されることもあります。
樹脂のようなもので張り付けられています。

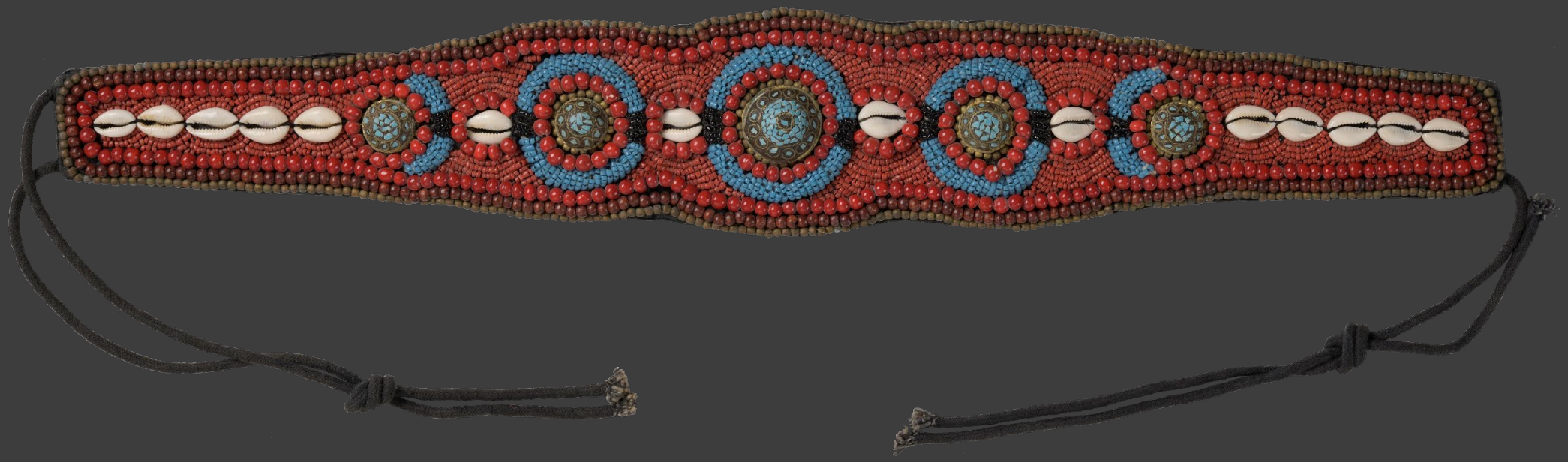
資料44　胸飾り

長さ：56cm
幅：23cm
収集地：パプアニューギニア
Mt.Hagen show

資料45　胸飾り

長さ：57cm
幅：17.5cm
収集地：パプアニューギニア

ハナビラダカラに顔料などで着色を
しています。また、付着物がついた
ハナビラダカラをそのまま利用しています。



資料55　サンゴベルト

長さ：136cm
幅：11cm
収集地：中国
泉州

タカラガイはハナビラダカラ。
ハナビラダカラの中でも比較的大きくて綺麗なものが使用されています。

# おわりに

・展示では90点のタカラガイ資料を紹介しました。

・利用の仕方としては、背面を割る、腹面を見せる、紐で結ぶ、粘土や樹脂で接着するなど、加工して使われていました。
背面を割って貝貨としても広く用いられていました。

・タカラガイは呪術的な価値を見出され、装飾やモチーフとしても取り入れられています。

・一つの素材に注目して資料を見ることの面白さが伝われば嬉しいです。

南山大学人類学博物館

# 参考文献


・江上波夫 1932 「極東に於ける子安貝の流傳に就きて」『人類學雜誌 47(9)』 日本人類学会
・三島格 1977 『貝をめぐる考古学』 株式会社學生社
・J·F·セイファー,F·M·ギル(訳 杉浦満) 1986 『海からの贈りもの 「貝」と人間－人類学からの視点』 築地書館株式会社
・渡辺芳郎 1989 「中国新石器時代タカラガイ考」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』 487-502頁 横山浩一先生退官記念事業会
・白井祥平 1997(1) 『ものと人間の文化史 83-I 貝I 』財団法人法政大学出版局
・白井祥平 1997(2) 『ものと人間の文化史 83-Ⅱ 貝Ⅱ』財団法人法政大学出版局
・山田勝芳 2000 『貨幣の中国古代史』 朝日新聞社
・佐原康夫 2001 「貝貨小考」『奈良女子大学文学部研究年報(45)』 21-37頁 奈良女子大学
・九州国立博物館 朝日新聞社事業本部西部企画事業チーム 編 2006 『九州国立博物館 2006年 真夏の特別展 南の貝のものがたり』 朝日新聞社事業本部西部企画事業チーム
・忍澤成視 2011 『ものが語る歴史シリーズ22 貝の考古学』 株式会社同成社
・柿沼陽平 2011 『中国古代貨幣経済史研究』 汲古書院
・「驚きの博物館コレクション展」実行委員会 2013 『驚きの博物館コレクション展 時を超え、世界を駆ける好奇心』 「驚きの博物館コレクション展」実行委員会
・池田等 淤見慶宏 2017 『タカラガイ·ブック(改訂版)日本のタカラガイ図鑑』 株式会社成山堂書店
・古川顕 2020 「古代中国の貨幣の起源」『甲南経済学論集 60』 45-91頁 甲南大学経済学会
・安木新一郎 2021 「殷代の貝貨と縄文時代のタカラガイ加工品」『函館大学論究 52(2)』 43-52頁 函館大学
・黒住耐二 2021 『ネイチャーウォッチングガイドブック 自然が生み出す驚きの造形美 日本と世界のタカラガイ』 株式会社誠文堂新光社
・理科教材データベース 「キイロダカラ」 (最終アクセス2021/9/20) http://www.ha.shotoku.ac.jp/~kawa/KYO/SEIBUTSU/DOUBUTSU/sango/okinawa/naitaidoubutsumon/kiiro/index.html